

混成第九旅団の日清戦争（3）

——新出史料の「従軍日誌」に基づいて——

原田敬一

〔抄録〕

本稿は、新出の史料である「従軍日誌」一編を使用して、「日清戦争」に従軍者がどのように描いているか、を追究した前号・前々号掲載論考の続きである。「従軍日誌」の著者は、混成第九旅団野戦砲兵第五聯隊第三大隊第五中隊に属する将校であり、一八九四年六月六日から翌年二月一日まで日記を書き続けた。戦後の清書や刊行物ではなく、現場で書いていた日記と推測され、しかも執筆者は、日本が日清戦争開戦前に朝鮮に派兵した最初の部隊の一員であった。参謀本部が編纂し、刊行した『日清戦史』全八巻には、中塚明氏などにより遺漏や改ざんの跡がいくつか指

摘されており、そうした点も、「従軍日誌」という軍人自身の記述により再検討することができる。『歴史学部論集』第1号に六月六日から七月二十六日まで、同第2号に七月二十七日から九月十四日（平壤総攻撃前日）までを掲載した。本号には九月一五日（平壤総攻撃日）から一〇月二三日まで掲載する。鴨緑江渡河戦以降は次号となる。

キーワード 日清戦争、従軍日記、混成第九旅団、砲兵、将校

はじめに

混成第九旅団の戦争は、いよいよ平壤戦へと移っていく。筆者の部隊も、歩兵の援護と攻城戦に参加する。部隊の正式な「戦闘詳報」に基づき参謀本部編纂の『日清戦史』が作成されたが、本稿の検討を続

ける中で、筆者の「従軍日誌」は少し記述が異なることがわかった。それを明らかにするため、本稿の叙述は複雑になったがお許し願いたい。二つの史料の違いについては、行論の中逐一指摘して、その理由などを最後に考えてみたい。また前号と同じく「従軍日誌」の引用のみ上下に罫線を引いて示した。

一 平壤戦

（1）混成第九旅団の苦戦と敗退

第五師団と混成第九旅団による平壤総攻撃は、九月一日未明から開始される。それに先立ち、混成第九旅団司令部は、一四日夕方、永濟橋南方高地で、一五カ条の命令と軍隊区分を発令した（『日清戦史』第二卷一〇〇～一〇五頁）。おおむね以下のような内容である。

- ①清国の平壤軍は、東から迫る日本軍（朔寧支隊と元山支隊）と南方からの日本軍（混成第九旅団）に対処するため二分された。
- ②旅団は「明十五日仏曉ヨリ前面ノ敵ニ決戦ヲ求メントス」③右翼隊は午前四時中碑石洞東方高地を出発し、船橋里（長城里のこ）の橋頭堡に向かい攻進すべし。④中央隊は午前三時土器店付近の高地を出発し、船橋里（同）の橋頭堡に向かい攻進すべし。
- ⑤左翼隊は、明仏曉までに羊角島に渡り、師団本隊が付近にいるのを確認できれば、平壤南部から攻進すべし。確認できなければ、旅団が軍橋を越え平壤に入ったのち前進すべし。⑥予備隊は中央隊に続いて出発し、中央隊の右側を前進すべし。旅団司令部は予備隊と共にある。⑦永濟橋南方高地（旅団司令部が一四日駐屯している場所）には野戦病院、大行李、輜重梯隊（糧食一縦列、山砲彈藥半縦列）が前進して待機せよ。

筆者の部隊は、野戦砲兵第五聯隊第三大隊第五中隊なので、③にある右翼隊に属することになった。関係地図は図1「平壤戦」を参照してほしい。

平壤守備軍は、總司令官を衛汝貴とし、盛字軍六〇〇〇（總兵衛汝貴）、穀字軍二二〇〇（總兵馬玉崑）、奉軍五三〇〇（總兵左宝貴）、奉天練軍盛字軍・吉林練軍吉字馬隊二〇〇〇（侍衛豐陞阿）に牙山から敗走した部隊（將軍・葉志超、聶士成）を合わせて、約一万五四〇〇余と、日本軍は見ていた（『日清戦史』第二卷二五七頁、附録第二十八「盛字、穀字、奉軍及盛字練軍ノ戦闘序列」。山砲二八門、ガトリング機関砲六門という装備の情報も得ていた（同）。砲兵隊は、その後左宝貴の要求で強化され、クルップ式七五ミリ野砲四門が回送された（同二六一頁）。数は少ないとはいえ、射程距離の長いクルップ式の最新式野砲が、混成第九旅団を苦しめることになる。大島混成旅団長が第一軍司令部に報告したところでは、「土民ノ言」として平壤守備軍は約四万人（九月一三日午後四時の報告、『日清戦史』第二卷附録第二十一「大島混成旅団長ノ報告」、混成旅団の挑発砲撃に應えるのは「僅か二三、四門（昨日ハ八門）」（一四日午後四時の報告、同附録第二十二「大島混成旅団長ノ報告」と過少にしか見ていなかった。また八月上旬から下旬にかけて、平壤守備のため、堡壘二〇個、軍橋一個などを城外に増築していた（同二七八頁）。情報不足から歩兵も野砲隊も前進を阻まれる結果となる。

九月十五日（土曜）は曇りで、午後五時から降雨となった。「從軍日誌」では、午前二時に中碑石洞まで前進して、そこで砲兵陣地を急造にかかった、と記す。『日清戦史』より二時間早いのが、午前四時に中碑石洞を出発するのは歩兵部隊で、筆者らの砲兵大隊は、露営地である仏堂洞（『日清戦史』第二卷一〇五頁）を出発して中碑石洞にと

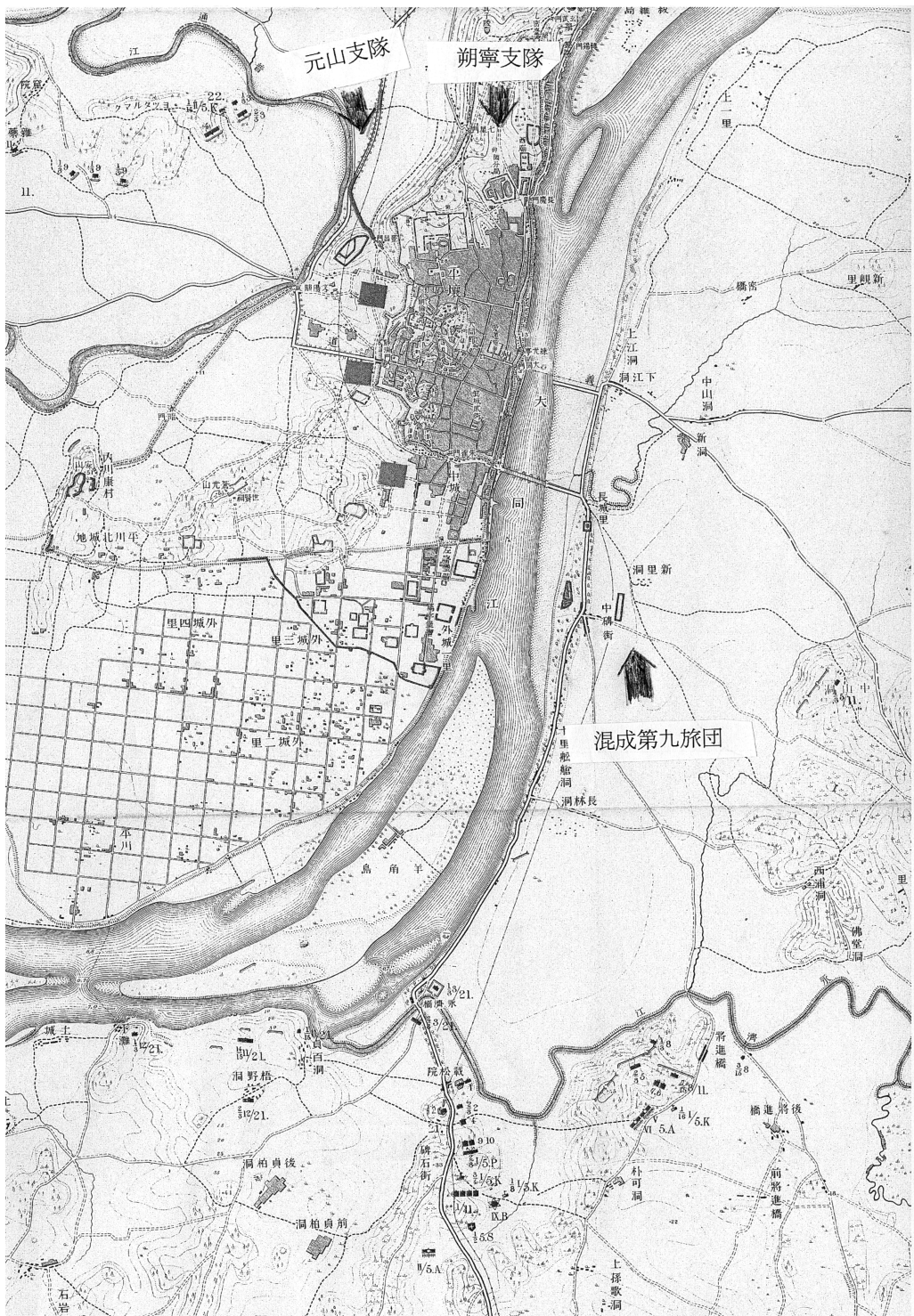


図1 平壤戦（出典：『日清戦史』附図9「平壤戦闘図（其三）」の一部）
注：「混成第九旅団」「朔寧支隊」「元山支隊」と矢印3点は著者が書きこんだ。

どまり、船橋里の橋頭堡に向かい前進する歩兵部隊を援護する役割だった、と理解すると、『日清戦史』との食い違いが理解できる。中碑石洞も清国軍の第一堡壘とは一六〇〇メートルの至近距離で、砲兵大隊が砲を囲む急造肩墻を築造している最中から、清国軍の砲撃が始まる。一〇〇〇メートルに二、三〇〇メートルと部隊の周囲に落下する砲弾を記録しているから、これは目標を定めるための砲撃だったと思われる。歩兵部隊は、午前四時に中碑石洞南方高地を出発し、野砲第三大隊の援護砲撃の中、畑地を前進して突貫し、午前五時には第一堡壘を占領した。日本軍は単発銃（一三年式・一八年式村田銃）装備だったが、清国軍は連発銃（戦利品にはドイツ製モーゼル小銃があった）装備で対抗した。

午前六時には、野砲第五中隊（筆者の部隊）は、前進して歩兵援護の砲撃に移るよう命令され、歩兵の占領した第一堡壘に向かった。弾雨のなか馬は使えないから、人力で押していったのだろう。それを清国軍は連発銃で狙い撃ちした。やっと第一堡壘に到着し、砲撃を再開したが、清国軍の第二堡壘は「僅か二四五百米突」の至近距離にあり、しかも突貫する様子も見えたため、人員殺傷用の霰弾に切り替え、発射したが、すぐに撃ちつくしてしまう。そこで距離観測用の曳火弾を発射角〇度、つまり水平撃ちにして連射したが、第二堡壘には効果がなく、そこからの連発銃による射撃で、第五中隊は中隊長以下四〇余名の死傷者という「非常ノ損害」を受けてしまう。第一堡壘は、左右の第二・第三堡壘と連携して架橋点を守備するように配置されており、日本軍の占領した第一堡壘は左右の堡壘から集中攻撃を受けることに

なった。砲兵隊だけでなく、歩兵の第八中隊も死傷者が続出する。

混成旅団の事前情報では、この架橋点にあるのは二つの堡壘だけで三つ目の堡壘の存在を知らなかった（『日清戦史』第二巻附録第二十一「大島混成旅団長ノ報告 九月十三日」）。『日清戦史』の編纂者は、混成旅団の情報収集の甘さに腹が立ったのか、本文中

中碑街河岸二角面堡ノ在リシコトハ全ク知ラサリシナリ（一〇六頁一行目の割注）

中碑街西方河岸ノ角面堡へ二行割…村落及樹林ノ為メニ隠蔽シ未タ曾テ我視目ニ上ラサリシモノナリ（二〇七頁）

四時十五分中碑街西方河岸ノ森林端ニ達シ始メテ前面約百米突ニ一ノ角面堡アルヲ発見シ（一〇九頁）

と三カ所と同じ「角面堡」の存在を知らなかったことと、そのため要らざる損害を被ったことを記している。

この間、中央隊も船橋里の橋頭堡攻撃のために前進し、左翼隊は大同江中洲の羊角島に渡河しはじめ午前五時には渡り終えていた（『日清戦史』第二巻一〇六頁）。

混成旅団の砲撃戦について検討しておこう。この日野砲第五中隊が費消した弾薬は、

榴弾 16 榴霰弾 187 霰弾 12

（『日清戦史』第二巻附録第二十六「明治二十七年九月十五、六日平壤戦闘費消弾薬表」）

で、霰弾はほんの少ししか持っていなかった。「従軍日誌」では曳火弾 386 霰弾 24（ほかに分捕砲小隊の砲撃弾数 265）

と記録され、『日清戦史』の榴弾が記載されず、全弾合計二一五発は、「従軍日誌」の合計四一〇発に及ばないが、理由はわからない。どちらかが計算違いをしている可能性が高い。

「附録第二十六」によつて、全部隊の二日間の費消弾薬を見ると、

榴弾	680	榴霰弾	2,128	霰弾	16	小銃弾	284,869
----	-----	-----	-------	----	----	-----	---------

であり、全部隊を通じて霰弾は保有していなかったと言える。榴弾は着地して破裂し、榴霰弾は空中で破裂して殺傷する。攻城戦には榴弾を多用して堡壘を崩す必要があるが、そうした使用法ではなかった。

「表」は二日間の記録とするが、戦闘は一五日に終わつていたので、一五日前五時から午後四時まで一六時間の砲撃戦と考えると、一時間当たり、

榴弾	42.5	榴霰弾	133	霰弾	1
----	------	-----	-----	----	---

という弾数が全部隊の平均値となる。参加砲兵は八箇中隊と分捕砲小隊で、合計五〇門の大砲が一時間平均三・五発しか撃つていないことになる。そこまで発射速度は遅くないから、この発射弾数の低さは、第一に混成第九旅団に表わされているように、砲兵隊が前進しすぎて死傷者だけでなく、機材も破損し、砲撃が続けられなくなったこと、第二に混成第九旅団に編成された野砲兵第五聯隊も第三師団に属した野砲兵第三聯隊も、野砲ではなく山砲装備の部隊だったこと、によるものである。分捕砲小隊も二門の山砲だった。野砲と山砲の違いはいろいろあるが、砲火の効力が大きく異なり、射程距離も野砲で最大五〇〇メートル、山砲は三〇〇メートルしかない。有効射程距離を半分とすると、山砲では一五〇メートル程度しか効力がなく、発砲

火薬も弱いため、威力は落ちる。一方、清国軍は、堡壘を強固に展開し、その上軽カノン砲である野砲を装備していたので、砲撃戦の効果は、日清両軍で段違いに異なっていた。砲兵の戦術的使用に誤りがあったことが、混成第九旅団の苦戦の理由であつた（拙著『日清戦争』二二〇～二二五頁、吉川弘文館、二〇〇八年）。

「従軍日誌」九月二五日条本文二一行目にあるように、砲兵第五中隊をはじめ、混成旅団全体に、朝出発した陣地まで退却するよう旅団命令が出る。大島旅団長は正午ごろには、戦況不利につき退却することを考え始めていた。

旅団長ハ其真相ヲ知ルニ苦ミツ、正午頃ニ至リシカ以為ラク、旅団ハ已ニ充分ニ敵ヲ牽制シ任務ノ大半ヲ遂成シタリ、久シク此不利ナル戦闘ヲ持続シ徒ニ損傷ヲ招カンヨリハ如カス、機ヲ見テ敵ト離隔センニハト（『日清戦史』第二卷一四一～一四二頁）

前日の午後四時に、大島旅団長が立見朔寧支隊長に「明十五日午前八時前後ニハ平壤ニ於テ貴閣下ト握手シテ 天皇陛下万歳ヲ祝センコトヲ期ス」（『日清戦史』第二卷附録第二三）と豪語した平壤占領はおろか、前線から退却する無様なことになった。退却は決心したもの、「其背進ニ方リ敵兵若シ出撃ニ転センカ、旅団ノ運命ハ殆ト測ラレサルモノ有リ」と危惧した大島は、長岡外史参謀を右翼隊・中央隊に派遣し、各隊長が大丈夫だと請け負えば、「直ニ之レニ退却命令ヲ伝ヘシムルコト」と命じた（『日清戦史』第二卷一四二頁）。各隊は、午後一時前後に退却命令を受領したので、午後二時半頃には一部が退却し、ほかは退却準備が終わつたという状況になった（同一四七頁）。

「從軍日誌」では、この日の死傷者を、砲兵第三大隊で「將校以下四十名」、援護の歩兵第八中隊で「八十余名」と記録している。『日清戦史』第二巻の「附録第二十五明治二十七年九月十五、六日 平壤戦闘死傷表」では、表2のように掲載され、「從軍日誌」とはあわない。ただ歩兵第一聯隊は表1にあるように、右翼隊と予備隊に兵力を出しており、両方を合算した数字である。予備隊は、午前五時一〇分第一中隊を、次いで午前五時二〇分過ぎ第二中隊を、右翼隊の左右両翼を増強する部隊として投入されている（『日清戦史』第二巻一一一頁）。この時点で、右翼・中央・予備の諸隊にあつた歩兵九個中隊は、すべて中碑街付近の橋頭堡に向かつて激戦を開始していた。

「從軍日誌」では、午後二時頃退却命令を受け、三時頃には中碑石洞の旧陣地に到着している。午後五時頃からの大雨と雷鳴は『日清戦史』でも第二巻一七四頁に記載がある。これが平壤守備軍の集団敗走を助けることになる。

九月十五日 晴 午后曇 五時ヨリ雨

午前二時ヨリ中碑石洞ニ進ム。直チニ砲列ヲ布キ既ニ急造肩牆ヲ築カントスル中夜未タ明ケスト雖モ敵ハ発砲ヲ開始シ榴彈ハシュウ／＼ト我等ノ頭上ヲ過ク。遠キハ千米突、近キハ二三百米突ノ彼方ニ落ツ。我歩兵ハ畑地ヲ前進シ我隊ハ距離千六百米突ヲ以テ目標ヲ敵ノ第一堡壘ニシ之レガ発射ヲ開始ス。時ニ漸クスルヤ突貫ノ声ヲ聞ク。此時ノ発射スルコト尤モ熾シニシテ頻リニ連発銃ヲ発火セリ。全五時歩兵ハ敵ノ第一堡壘ヲ占領セリ。於是我砲兵ハ橋頭堡ニ在ル堡壘ニ向テ発射ス。午前六時第五中隊ハ左側ヨリ

前進ノ命ヲ受ケ畑道ヲ前進シ我歩兵ノ占領シタル敵ノ第一堡壘ニ進ム。時ニ敵ハ其前進スルヲ認メ頻リニ発砲セリ。漸クニ其堡壘ニ接スルニ我歩兵一ケ中隊ノミアリテ我ヲ掩護セリ。直チニ砲列ヲ布キ発射ヲ始メタルニ其距離僅カニ四五百米突ニシテ敵ハ突貫スルノ模様アリシ為メ霰彈ヲ発射ス。既ニシテ其弾尽ク。曳火彈ヲ〇分角ニテ発射シタリ。敵ノ第二堡壘ハ堅牢ニシテ然カモ有名ナル連発銃ヲ以テ発射ス。為メニ我隊非常ノ損害ヲ受ケ中隊長以下四十余名ノ死傷者ヲ生シタリ。元來此地ハ砲兵ノ前進シ来ルニ不利ニシテ敵ハ三ヶ堡壘ヲ以テ架橋点ヲ護リシモノ、如クニシテ特ニ此第一堡壘ハ左右ノ中間ニアルコト故左右ヨリ発射スル銃丸ハ悉ク我ニ雨注シタリ。故ニ歩兵ニ於テモ亦多クノ死傷ヲ生シ白煙ハ天地ニ満チ銃声サナガラ職工場ノ音ノ如シ。各兵ノ惨状実ニ感涙ニ余リアリ。時ニ衛生隊前進シテ負傷者ヲ后送ス。

此時我々兵士ハ夏袴ヲ着シタレハ流血ノ瀧ノ如ク白衣モ亦為メニ赤クシテ赤絨袴ヲ着スルカ如シ。然ルニ勇壮ナル兵士ハ奮然トシテ既ニ二三ノ銃丸ヲ受ケナカラ尚生ヲ忘レテ敵ニ迫ラントス。其有様実ニ筆紙ノ尽ス可キ限リニ在ラズ。

午前十一時我砲兵ハ悉ク堡壘ノ蔭ニ入り休憩シテ昼食ヲ喫ス。敵ハ尚頻リニ発砲セルモ我隊ハ彈藥欠乏ノ為メ之レニ応射スル不能。漸時此処ニ在リ。既ニシテ午後二時頃ニ及ヒ旧陣地ニ退却ノ命アリシヲ以テ小隊各個ニ退却セリ。時ニ第六中隊ハ我援護ノ命ヲ受ケ盛ニ敵堡壘ニ向テ発砲セシモ敵ハ連発器管砲ヲ用ヒ退却スル我隊ニ向テ頻リニ発火セリ。

此時迄ニ我隊ニ於テ死傷セル者將校以下四十名我掩護ノ歩兵隊ニ
八十余名ノ多数ニ及ヘリ。

午后三時中碑石洞ノ陣地ニ退却シ終ルニ尚亦土器店陣地迄退却ノ
命アリ。其退却路中平壤ニ向テ後方ヲ望メハ其西端ノ敵ノ幕営地
近傍ハ兵火ニ羅リ白煙天地ヲ掩フテ俄カニ天候ノ変セシヲ見レハ
歴史ニ伝フル古戦モ亦如スカト思ハル。実ニ名図画ニアル急戦激
闘図ノ如シ。斯クスル内土器店ニ帰りタリ。時シモ大降雨来リ。
各兵非常ノ困難ス。

午后五時ヨリ益々大雨来リ雷鳴アリテ各兵ヲシテ一層ノ感情ヲ起
サシム。

夜間ニ於ケルモ銃声止マズ。午后十一時頃尤モ熾シナリ。蓋シ元
山及朔寧支隊力既ニ迫リシ者ナル可シ。此日ノ費消弾数霰弾二十
四個曳火弾三百八十六個分捕砲小队二百六十五個ナリ。

(2) 朔寧支隊と元山支隊の攻撃成功

平壤城を大同江東岸から攻略しようとしていた混成第九旅団は、戦
闘七時間にして敗退、退却したが、実は東北方から迫っていた朔寧支
隊と元山支隊の攻撃は成功していた。朔寧支隊は、午前五時三〇分頃、
牡丹台の外郭・第三堡壘と交戦を開始し（野砲兵第五聯隊第一中隊の
援護砲撃）、午前七時少し前には第二・第三堡壘の占領に成功した
（『日清戦史』第二卷一二二頁）。元山支隊も、やはり外郭の第三・第
四・第五堡壘を攻撃し（野砲兵第五聯隊第三大隊の援護砲撃）、午前
七時頃占領した。退いた守備兵は、牡丹台に据え付けられたガトリン

グ機関砲をもって「頑強ニ防守シ」「一大劇戦ヲ演スルニ至レリ」（同
一二八頁）。

午前七時過ぎから八時頃にかけて、両支隊の砲兵隊は牡丹台の守備
兵を的確に砲撃し、「射弾著々命中シテ毫モ虚発ナシ、戦線ノ歩兵覺
ヘス喊声ヲ発ス」（同一四八頁）。この集中砲火で、八時半頃玄武門か
ら両支隊の二個小隊が侵入した（同一四九頁）。援護のため砲兵隊は、
乙密台にある譙樓破壊のため「暫時猛烈ナル榴弾射撃ヲ行ヒ能ク之ニ
命中セシメタルモ能ク其効ヲ奏セサル」（同一五〇頁）というのは、
先に述べた山砲編成のため射撃効果が小さかったと判断できる。午前
一一時頃、七星門から守備兵約二〇〇名が出撃してきて、元山支隊の
右翼を攻撃した。砲兵隊が応戦して、出撃してきた隊長の総兵左宝貴
が即死すると、「余衆散乱シテ」（同一五六頁）城内に戻った。

師団主力も、午前七時頃には平壤城西南方二キロの外城付近の攻撃
に移り、城郭に迫っていた（同一五七―一六七頁）。この戦線は正午頃
攻撃を中止し、翌日未明に総攻撃をかける準備を始めた（同一六七頁）。

朔寧支隊は、午後三時三〇分頃、戦況は停滞したので、本日中の決
戦はない、と判断し、攻撃中止・前線維持・現在地での宿営を命じた
（同一七三頁）。午後四時四〇分頃、朔寧支隊前面の城壁から將旗が降
ろされ、突然白旗が掲げられる。午後五時頃からの大雨と雷で、前線
での意思疎通がはかどらず、明朝開城する、との応答をようやく得る
（同一七四頁）。朔寧支隊では、即刻開城、の要求が受け入れられなか
ったため、午後九時には「敵ハ本日降意ヲ表シ明日ヲ以テ城ヲ明渡ス
ヲ約セリ」などの情報を傘下各隊に伝え、明朝仏曉からの攻撃準備を

命令した（同一七七頁）。元山支隊も、城壁の白旗を見て攻撃を中止し、入城を要求したがやはり実現せず、午後七時に傘下各隊に対し、降伏伝達と支隊の城外露宮と警戒を命じた（同一八〇頁）。その後再び、午後八時頃から九時頃まで雷雨が続く（同一八一頁）。両支隊が危惧したとおり、平壤城守備軍は、午後九時頃以降隊伍を組んで、城を抜けていった。降伏の作法に反する脱走を、日本軍は歩兵・工兵の射撃で応じ、壊走させている（一二二頁）。第五師団では、ようやく午後七時三〇分、朔寧支隊と連絡が取れた歩兵中尉が帰還して、守備軍の白旗掲揚を知ることになった（同一八四頁）。

（3）清国軍の平壤城脱出

激戦の一五日を経て、清国軍は同日夜半に平壤城を撤退していた。平壤ノ清兵ハ十五日夜半以前已ニ城ヲ出テ、其尚ホ此ニ留マリシ者ハ頗ル少数ニシテ、即チ傷病等ノ為メ撤退ニ伴フ能ハサリシ者及脱城ノ時機ヲ失シ已ムヲ得ス城内ニ彷徨シタル者ニ過キサリキ（『日清戦史』第二卷一八七頁）

守備軍のほとんどがもう城内にはいない、という状況を攻撃軍は知らなかったため、師団主力では暗門強襲部隊（歩兵第二二聯隊第二中隊、第三大隊）、文陽閣強襲部隊（歩兵第一二聯隊第二大隊、第三大隊）を編成して、一六日午前〇時半と午前一時一〇分に出発させた（同一八七～一八八頁）。前者は午前一時二〇分頃、後者は午前二時頃に文陽閣から城内に侵入し、若干の残存兵を追いついて占領する（同一八九頁）。暗門急襲部隊が、乙密台付近で号音を吹奏して「占領」

を城外部隊に伝えた。野津師団長が、歩兵第一一聯隊第三大隊に戦場掃除（死体処理を中心とする）を命じたのは午前五時、宿营地の大湯洞高地を出発したのが午前五時三〇分で、午前七時に平壤城に入った（同一九二頁）。

混成第九旅団の動向は、師団主力とは異なっていた。一五日の損害が大きかったため、一六日の総攻撃（前述したように、情報が錯誤して、混成旅団では総攻撃が一六日に延びた、と考えていた）に参加できかどうか、様子を見ようとしていた。

混成第九旅団ハ昨十五日ノ戦闘ニ於テ夥多ノ損害ヲ蒙リテ頗ル戦闘力ヲ減シタルニ因リ、旅団長ハ是日姑ク現地ニ次シテ各方面ノ情況ヲ視、然ル後チ攻守孰レカニ決スル所アラントセシ（一九二頁）ところが、午前五時前後には大同江右岸に日本兵の姿が認められ、どうも占領したようだ、という観測がなされる（同）。混成旅団が、各隊に平壤城への進行を命じたのは午後八時だった（同一九三頁）。

「従軍日誌」九月一六日（日曜）の条では、この間の経過をどのようにに描いているのか。午前六時から七時の間に、平壤占領の情報を掴んでいた、と著者は記している。激戦だった第二堡壘を調べると、地雷九個が発見され、掘り出す。清国兵の死体が少ないのは、川に流すなどの処分をしたからだろうと推定する一方で、負傷して脱出できなかった日本兵を、残忍な形で見つけ、落涙する。戦闘をめぐる作法の違いが、両軍の残忍さを増加させているのではないか。戦場では「目には目を」の心情に陥りやすい。『日清戦史』は、

此戦闘ノ為メ日本軍ハ將校以下死者百八十名、傷者五百六名、生

死ヲ詳ニセサル者下士以下十二名附録第二十四、第二十五参照ヲ出シ（中略）清

軍ニ在テハ總兵左宝貴以下約二千余名之ニ死シ、日本軍ニ捕獲セラレタル者六百余名傷者百二十人ヲ含ムノ多キニ上リ、傷者及失踪者ノ数挙テ数フ可カラス（一九八頁）

と日清兩軍の死傷者数を記録している。数字の細かさは兩軍について同じようであり、冷静に記録されていると言えよう。

勝利して戦場を見学し思うのは「歴史」であり、それと比較しての自分の姿である。「従軍日誌」の筆者も、平壤城を落とせず大敗した小西行長を想起し、勝利し占領した自分たちを自ら顕彰している。

九月十六日 曇

午前六時左翼中隊ニ二ケ中隊ヲ増加シ平壤ニ前進ノ命ヲ受ク。昨日ハ白煙ヲ以テ掩ハレ彈丸雨中ノ間ニ奔走シ今日モ亦如斯処ニ至ルカト思ヒ遠眼鏡ヲ以テ敵狀ヲ窺フニ我兵処々ニ散在スルヲ認メ喜テ曰ク平壤ハ我既ニ之レヲ占領スト。

午前七時前進シテ橋頭堡ノ架橋点ニ達シ見レハ必死ニナリテ戦ヒシ敵ノ第二堡壘ハ我歩兵カ三四ノ突貫ナシタルモ嶮ト其外堡ノ堅固ナルニ依リ頼ミニセシモ無理ナラズ。其周囲ハ九ヶ所ノ地雷火ヲ地下ニ埋メタルヲ認メ之レヲ掘出シタリ。此砲壘附近ニハ数多ノ敵兵斃レ居ルコト疑ヒナキニ其死体ヲ見サルハ全ク大同江ヘ流シ或ハ將校ノ如キハ地下ヘ埋メタルカ僅カ四五名ノ砲彈ニ胸或ハ頭部ヲ撃破セラレ即死セルヲ認メタルノミナリ。

然ルニ最モ悲ヲ感セシハ我歩兵將校下士及兵卒カ昨日突貫ノトキ負傷シ歩行ヲ得ス終后方ヘ残り人ノ助ケヲ受クルコト能ハザリシ

モノアリト見へ、之レヲ残酷ニモ野蠻ノ慣トシテ其首ヲ斬リ左右

両手ヲ斬リ只其胴ノミヲ残シ居レリ。実ニ切齒扼腕人ヲシテ怒リヲ発セシム。其慘狀ヲ思ヘハ我兵カ捕ヘラレシモノ今日迄ニ幾人カアリ。呼鳴之レヲ思ヒ思フテ涙落ツ。

大同江ニ架設シアル舟橋ハ薄弱ニシテ且ツ破損セシ処アリテ渡河ニ困難ヲ来シ長時間ヲ費セリ。午后四時舟橋ヲ渡リ同岸ニ沿ヒ城牆西端ニ至リ民家ニ入り舍營ス。

昨日ハ頗ル頑固抵抗ヲセシ支那兵モ一朝ニシテ此平壤ヲ引渡シタリ。旧小西行長カ大軍ヲ以テ之レニ当ルモ遂ニ大破ヲ取りシカ如キ其天然地形形状ハ実ニ強固ナル城市ナリ。

二 平壤戦の後

九月一七日（月曜）は晴れで、占領した平壤城の堡壘を見学するにはいい日和となった。休日が与えられたと思われる。砲兵に限らず歩兵にも占領後時間を置かず見学時間を与えているのは、戦闘の興奮状態を覚ませ、攻撃の成果如何を自ら確かめる機会となっているのではないか。城内外の「見学」は七時間という長いものだった。「感動・感激」しながら見学を続けている筆者たちの姿が想像できる。

九月十七日 晴天

午前六時頃ヨリ敵ノ堡壘中ヲ見物スルニ或ル堡壘ハ負傷二三アリテ苦痛シアリシカ中ニモ我將校ノ首帽被服及携帶物又ハ兵卒ノ手足首等ヲ昨此処ニ運ヒシト見ヘ其数凡数十名ヲ見ル。中ニモ手指

ヲ一個ツ、又ハ耳ヲ針ニ通シ麻糸ヲ以テ之レヲ綴メアルヲ認ム。亦斬首セシ者亦眼鼻ノ区別ナク之レヲ一分斬トナシアルヲ認ム。呼鳴此吾全胞カ甚慘酷ノ界ニ陥リシガ敵兵ノ野蠻ナル余等ヲシテ切齒扼腕置ク能ハザラシム。巡視シテ他堡壘ニ至レハ「クルツプ」野砲及山砲二十門ヲ視ル。午后一時舎營ニ帰ル。

九月一七日は黄海海戦が日本の聯合艦隊に有利な形で終わった日だった。『日清戦史』第二巻は、

此海戦ニ於テ、我艦隊ハ末タ全ク清国北洋艦隊ヲ殲滅シ得サリシト雖モ、殆ト其戦闘力及航海力ヲ失ハシメ、朝鮮国近海ハ勿論清国海面ノ制海権ヲ掌握シ得タリ（二五〇頁）

と北洋艦隊を殲滅できなかったが、黄海などの制海権は握った、と評価している。二一日には広島の本営まで黄海海戦の詳細報告が届き、直ちに天皇は「特殊ノ勲功ヲ奏スルヲ嘉ス」という勅語を発した（同）。二〇日か二一日には第一軍にもこうした状況が伝わっているとされるが、筆者の「従軍日誌」には、黄海海戦関連の記事が全く見当たらない。苦戦した平壤陥落の感動が大きすぎたのだろうか。

九月一八日（火曜）も晴天で、師団司令部から、上等兵のうちから下士官（伍長だろう）に昇進する者の伝達が行われた。下士官採用は師団長の裁量で行えることであり、また平壤城攻略作戦で将校と下士官の喪失が多く、それを補うものだった。死傷者数について、「従軍日誌」の筆者が記すところは、日本軍については正確に、清国軍については相当過剰である。旅団司令部等の推測であろう。

一九月十八日 晴天

此日上等兵下士ニ昇進スルモノ多シ。蓋シ今回戦闘ノ為メ欠員ナリシヲ補欠セシナリ。此日我死傷者取調ヲ聞クニ六百八十四名ニシテ敵ノ死傷約五千人ナリ。

九月一九日（水曜）も晴天。朝鮮の秋空は、空まで突き抜けるような青さだっただろう。平壤攻略作戦の戦利品調査が発表された。『日清戦史』第二巻では次のように記している。

日本軍ノ鹵獲セル兵器ハ野砲四門、山砲二十五門、機関砲六門、砲彈約九百発、小銃千百六十挺、小銃彈五十六万発ニシテ、其他雑兵器、金銀貨幣等品目数量殆ト枚挙ニ遑アラス、且ツ糧米二千九百余石即チ約一万五千口ニ対スル一箇月分此他雑穀二千五百余石ヲ鹵獲セリヲ得テ日本軍ハ爾來暫ク之ニ依リ給養ヲ弁シタリ（一九八頁）

大砲の合計が「従軍日誌」のほうが過大である（二三门多い）。弾薬は計量方法が異なるので相違は分らない。小銃数はほぼ一致する。軍旗・天幕・馬匹は「雑兵器」に数えられたのだろう。米穀も「従軍日誌」のほうが三倍以上となり、過大である。しかし、『日清戦史』が語るように、平壤攻略作戦まで苦しんできた糧食不足という課題がしばらく遠のいたことは確かだった。鴨緑江まで前進する上においても、一万五千人の糧食を一箇月分確保したことは、平壤攻略作戦に従事した第五師団と第九旅団にとって幸運となった。

九月一九日の条末尾に記された、捕虜五〇〇人のうち、「抵抗セシ者四十八名ヲ斬殺ス」というのは衝撃的である。捕虜となっても場合により処刑される場合はあるだろうが、こうした類の記録は『日清戦史』にはない。

九月十九日 晴天

此日分捕品ノ取調ナル。其大略左ノ如シ。

野砲山砲合計四十八門 彈藥五十八萬貫分

小銃千百六十五挺 軍旗三百二十

天幕一千八百 馬匹三百頭

米穀一萬名 金銀二十五貫五百目

捕虜五百人内抗抵セシ者四十八名ヲ斬殺ス。亦赤十字社二入り負傷者ヲ救護セシ者三百人。

九月二〇日（木曜）も晴天で、米は戦利品の米で、副食物に鶏肉約四〇匁（約一五〇^{グラム}）があったことを「佳良」と喜んでいる。鶏肉も戦利品だったかもしれない。

九月廿日 晴天

此日副食物ハ佳良ニシテ鶏肉一人ニ付約四十匁ツ、ヲ分配セラル。米ハ不相変分捕ノ支那米ナリ。

九月二一日（金曜）と二二日（土曜）は天候の記述だけだった。一七日から二二日まで六日間晴天が続いた。龍山付近に駐屯していた時の日記には、訓練状況が書かれていたが、平壤攻略作戦以後はそうした記述はなくなった。訓練していいことはないはずだが、戦闘に比べればはるかに緊張感が弱く、記述する気力を持たなかったのではな

九月二二日 晴天

九月二三日（日曜）は雨だったが、明治天皇が一七日に下した勅語

の奉読式が旅団として行われた。おそらく第五師団も別個に奉読式を行っていたと思われる。勅語は次のように、平壤攻略作戦の成功を称えているものだった。

朕本営ヲ進ムルノ初メニ当リ我軍大ニ平壤ニ捷ツノ報ニ接シ深く忠良勇武ナル將校下士卒ノ勤勞ヲ察シ速ニ特偉ノ功績ヲ奏セシヲ嘉ス（『日清戦史』第二卷二〇〇―二〇一頁）

「本営ヲ進ムルノ初メ」にあるように、大本営は九月一五日に広島に移転開設されたところで、それは平壤総攻撃の日だった。勅語に対しては臣下からの応答があるものだが、『日清戦史』は、野津道貫第五師団長の奉答文だけを記述している（第二卷二〇一頁）。

臣道貫 常ニ其任ニ堪ヘサルヲ恐ル、幸ニ平壤ヲ抜キタルハ全ク陛下御威徳ノ致ス所ナリ、今や優渥ノ勅語ヲ忝ウス、將校下士卒皆感泣シテ益々奮進一死以テ 聖恩ニ酬ヒ奉ランコトヲ誓ヘリ、謹ミテ奉ス

攻略作戦の成功は明治天皇の「御威徳」によるもので、將校下士官兵卒みな勅語を感激のあまり泣いており、ますます作戦に励む、という応答だが、これも奉読式で読まれ、師団の一体性を高め、次の作戦への意思を強くする効果をあげただろう。

九月廿三日 雨

此日午前八時平壤ノ西端高地ニ於テ我旅団ノ各隊集合シ 大元帥陛下ヨリノ勅語奉読式行ハル。

九月二四日（月曜）はうって変わって晴れたが、筆者の部隊は宿営地を変更となった。野砲兵第二大隊の出発とは、次の作戦が開始され

たことを意味する。第五師団司令部では、平壤攻略作戦終了後の一七日、平壤東北方五五キロの永柔に向けて追撃支隊（歩兵第一二聯隊第二大隊、騎兵第五大隊第一中隊）を出発させていた。鴨緑江岸の義州と平壤の間約三〇〇キロ、そのほぼ中間に清川江があり（図2）、そこまでの進撃路・補給路を確保するための追撃支隊でもあった。支隊は一八日には永柔に到着し、清川江左岸の安州や河口の老江鎮などの敵状を探り始める。一九日か二〇日に、山県有朋第一軍司令官から野津第五師団長へ、速やかに部隊を北進させるように、という命令が届き、第五師団は二つの梯団に分かれて北進し、鴨緑江左岸の義州に向かうことにする（第二巻二一〇頁）。

野津第五師団長は、「平壤ノ大捷ニ依リ朝鮮ノ人心我ニ畏服シ從テ糧食及軍夫ノ徵發從來ノ如ク困難ナラス」（同二二一頁）と、平壤攻略作戦の成功などにより朝鮮民衆の感情が和らぎ、これまで困難だった食料と運搬人員、牛馬などの調達が容易になるだろうという楽観的観測を持つようになった。これより以前、平壤攻略をめざした第五師団は部隊を半分に分け、八月三十一日に第二梯団が開城を、第二梯団と師団司令部が九月一日に漢城を出発している。梯団を分けたのは糧食問題だった。日本から派遣した日本人軍夫だけでは運搬力が不足し、朝鮮人軍夫を集めようとしたが、離散してほとんど使えなかったこと、道路が險峻なため牛馬では運べず、軍夫に頼るしかなかったこと、日中の炎暑などの悪条件があり、糧食の定量を減らしたり、「菽粟ヲ嚙ミテ纔ニ飢餓ヲ免ル、ヲ得ルニ至レリ」（同九三頁）という有様だった。「従軍日誌」九月一九日条や『日清戦史』第二巻一九八頁に記載

されていた戦利品としての米穀も、野津の楽観的観測を支えていた。しかし、第二梯団は「給養意ノ如クナラス」（同二二三頁）、平壤から安州まで五日間を要した（同）。

第五師団のうち第一梯団（歩兵第一二聯隊、歩兵第二二聯隊、騎兵第五大隊、野砲兵第五聯隊第一大隊、工兵第五大隊の一個小隊）は二三日に平壤を出発し、第二梯団は二四日に同じく出発している。野砲兵第五聯隊第二大隊は第二梯団として出発したので、筆者の第三大隊は、その宿营地に移った。

九月廿四日 晴天

此日第二大隊出発ニ付宿营地ヲ変シ西端高地ニ幕営ス。

九月一日、大本営は、第一軍を編成し、軍司令官を山県有朋と決定する（第二巻二〇頁）。第一軍は、第五師団と第三師団、さらに予備砲廠・第三野戦電信隊・第六野戦電信隊・兵站輜重（一〇隊）を加えた編成（九月八日第六師団に属する混成第一二旅団を増加…第二巻二六頁）。九月四日字品港を出た山県有朋は、一〇日朝鮮の長直路で伊東祐亨聯合艦隊司令長官と会商し（同二三頁）、一二日仁川港に上陸した（同二〇一頁）。一四日漢城着、一六日漢城出発、一九日開城着、二〇日開城出発、二五日軍司令部とともに平壤に到着した（同二〇五頁）。「従軍日誌」も二五日（火曜）の山県到着を記録している。

九月廿五日 晴天

此日山縣大將來着。

二六日（水曜）も晴天で、筆者は平壤城内外の巡視を実施し、「不潔」感を持った。実感であるとともに、朝鮮に対する先入観も関係し

第一軍平壤附近合集之圖

明治二十七年九月十三日

佛教大学 歴史学部論集 第三号（二〇一三年三月）

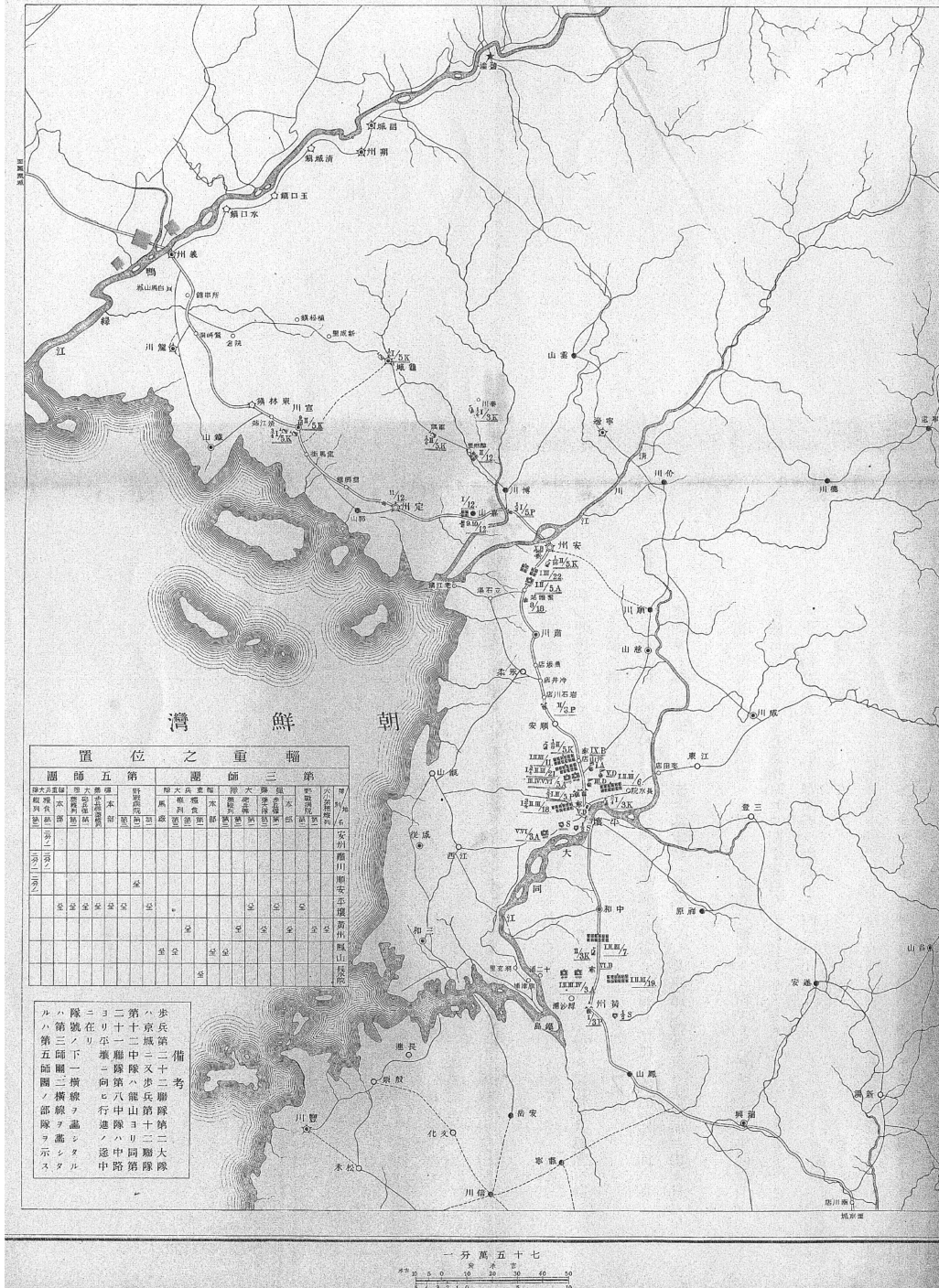


図2 第一軍の行軍図（出典：『日清戦史』第2巻「挿図第一」）

ていただろう。関帝廟では、一五日の激戦を思い起こし、「我全胞」の「鮮血」を記憶にとどめた。国民としての一体感を強めていく筆者の心情が見えて来る。

九月廿六日 晴天風

此日平城内外ヲ巡視スルニ関帝ノ廟ニ至ル。中々美麗ヲ尽シアリシカ今ハ不潔極マル、又第三師団ノ歩兵第十一聯隊カ牡丹台ノ敵ニ向テ前進シ来リ最モ劇烈ナル戦闘ヲ成シタル処ニシテ周囲ノ樹木ニ至ル迄砲彈ヲ以テ裂断スル者多ク終我全胞力負傷ノ為メ其廟内ニ入り鮮血ヲ流シタル有様ハ吾人ヲシテ最モ忘レ得サラシム。

二七日（木曜）、二八日（金曜）、二九日（土曜）の三日間も晴天が続いたが、記述はない。まだ平壤に駐屯しているようだ。

九月廿七日 晴天

九月廿八日 晴天

九月廿九日 晴天

九月三〇日（日曜）に、勅使中村覚歩兵中佐が平壤に到着し、軍の状況視察と清酒・煙草の下賜品を持参した。侍従武官中村覚は陸軍に、同じ侍従武官の斎藤実海軍少佐は海軍に派遣され、九月二二日には宇品港を出発してともに仁川に向かった。三〇日中村勅使が到着し、山県軍司令官に「聖旨」を伝え、山県を感激させた（『明治天皇紀』第八卷五二二頁）。

九月三十日 晴天

此日勅使トシテ中村歩兵中佐着セラル。其要旨ハ将校下士卒ニ酒煙草ヲ 陛下ヨリ賜ルルコト及師団長ノ安否分捕品負傷者ノ取調

一聞取りノ為ナリ。

一〇月一日（月曜）も晴天だったが、初めて夜の寒さが記述された。軍から支給されたのは普通の軍服と外套だけだったので、寒さが強く感じられたようだ。まもなく冬服装が支給されることになる。もう一つ、筆者が危機感を持っているのは食事内容と兵士の体力だった。米は戦利品の支那米で、副食物は昆布と高野豆腐の塩煮だったので栄養不足になっているというのが筆者の判断である。

十月一日 晴天

夜間ノ寒冷ハ日ヲ追フテ加ハリ身ニ着スルハ軍衣ト外套ノミ。而シテ米ハ分捕ノ支那米ニシテ副食物ハ昆布ト高野豆腐ノ塩煮ノミニシテ各兵士ハ日増体力衰弱ノ状アリ。

一〇月二日（火曜）の記事はなく、天候のみだった。特別な記載もなく、天候だけをたんたんという平穏な日々はもうすぐ終わる。清国領へ渡つての次の戦闘があるはずだ。

一十月二日 晴天

三 鴨緑江への前進

一〇月一日、平壤の山県第一軍司令官は、第三・第五兩師団に鴨緑江の渡河点である義州方面へ進軍するよう命じた。第五師団は四梯団に分かれ、一〇月五日から六日にかけて出発し、筆者の野砲兵第五聯隊第三大隊は本隊の第二行進団隊（第四梯団）となり、六日に平壤を出発、同日中に順安に到着せよ、と命じられる（第二卷二一六―二一

七頁、二二四頁）。その命令が一〇月三日（水曜）に届いた。出発に先立ち、一九本のタバコと清酒一合が配布される。宿営地ではさやかな宴会でもあったのだろうか。

十月三日 晴天

来ル五日ヨリ義州方行ニ前進ス可シト。

午后煙草十九本ツ、及酒一合ツ、ヲ分配セラル。

四日（木曜）は出発準備に追われていたはずだが、なんの記述もない。夜に入って三時間も大風が吹いた。鴨緑江を渡つてからの戦闘に思いをはせたのではないか。

十月四日 晴天 午后七時ヨリ十時ニ至ル迄一陣ノ大風来

出発前日の一〇月五日（金曜）になった。分配された清酒五勺と鶏肉一五匁（約五五グラム）は、夕食なのだろうか。營養と元気づけ・寒さしのぎの意味だろう。

十月五日 晴天

此日一人ニ付酒五勺ツ、鶏肉十五匁ツ、ヲ分配セラル。

一〇月六日（土曜）が出发予定日で、筆者たちの部隊は午前三時に起床して準備したが、伝令の騎兵が部隊に来て、出発延期を伝える。どのような意味の延期かわからなかったので、筆者たちの部隊は、装備をつけたまま立ち尽くした。ようやく午前七時に宿営地東の関帝廟で宿営せよ、という命令が届いた。結局この日は出発せず、関帝廟で宿営することになった。

十月六日 晴天

午前三時起床。義州ニ前進ノ様意ナシタリシニ伝騎来リ本日ノ出

発見合ノコト。

午前三時ヨリ六時迄ハ各兵露ノ如クニシテ睡眠スルコト不能立チ明シタリ。午前七時ニ至リ漸ク其東ナル関帝ノ廟ニ至リ舎営スルノ命アリ。

出発延期になったのは糧食不足が理由だった。第一軍司令部は第五師団本隊の第一行進団隊と共に一〇月五日平壤を出発し、同日順安に到着したが、糧食補給に問題のあることを知る。より北方の定州（義州南方約一二〇キロ、順安の東北約一三〇キロ）に糧食を運搬中の信濃川丸が、適当な揚陸地を発見できず、引き返したこと、必要な数の軍夫を確保できなかったために「陸路運搬力欠乏」（第二卷二二五頁）したこと、の二つが原因だった。軍司令部は、ただちに第三師団と第五師団に前進中止を命じた。出発延期となり、関帝廟に宿営しているため、一〇月七日（日曜）に筆者たちは入浴という幸運を得る。八月二〇日龍山を出発して以来、と言うから、約五〇日ぶりの入浴となった。入浴も戦場ではあまり経験できない事柄の一つだった。

十月七日 晴天

此日入浴ヲナス。龍山出発以来入浴之レヲ始メトス。

第二軍司令部は、一〇月五日前進中止を命じた翌日の六日、糧食調達のためにいくつかの指示を出した。第一に、漢城の大島圭介公使と平壤の小村寿太郎外務書記官に朝鮮政府との交渉を求めた。趣旨は、①「朝鮮政府ヲシテ糧食運搬ノ為メ責任ヲ以テ人夫牛馬ヲ徵集シ兵站部ノ需要ヲ飽足セシムヘキコト」、②「日本銀貨ノ通用ヲ布達スヘキコト」である（第二卷二二九頁）。①は決定的に不足している日本人

軍夫を補うため多数の朝鮮人軍夫を雇用することとしたが、思うように集まらないため、朝鮮政府と地方機関の協力を求めようというものだった。②は、人員・牛馬・糧食の調達で、日本から銅銭と銀貨を大量に持ち込んだが、高額貨幣の銀貨の流通に支障があったため（理由は不明）、通用させるよう布達を求めている。同時に食料は早く求めねばならず、「第三、第五両師団長二命令シ、安州、平壤間ニ駐在スル軍隊ヲシテ一時糧秣ノ運搬ニ任シ兵站ノ業務ヲ幫助セシメタリ」（同）。戦闘部隊を糧食運搬に投じなければならないほど糧食調達が困難になっていた。一〇月八日（月曜）の「従軍日誌」も、兵士の糧食運搬を記録している。

このようにしても平壤に輸送できる糧米は一日約一〇〇石に過ぎず、これでは前進どころか駐屯中の部隊全部に行き届くことはなかった（同）。必要なのは一日最低で約五〇〇石の糧秣と副食物である。兵站部では、「韓軍夫及既著ノ徒歩車輛等ヲ使用」して五〇〇石輸送に努力した（二三〇頁）。先の軍司令部の要求から考えても、朝鮮人軍夫の確保には相当無理をしているだろう。海軍や運送船の運搬が期待されたが、沿岸の測量も行いながらの実施であり、なかなか適地が見つからないという状況が続いていた。

十月八日 晴天

此日ヨリ各隊ノ兵卒ヲシテ糧食運搬ノ助力ヲナサシム。右ハ全ク糧食運搬ノ困難甚シキヨリナリシ者ニシテ之レカ為メ曩ノ前進モ見合セタル者ノ如シ。

珍しく「十月九日」（火曜）は項目すらない。一〇日（水曜）と一

一日（木曜）はまだ平壤に駐屯中だが、清酒を分配されている。分量の少なさから考えて、宴会ではなく寒さ対策だろう。酒で寒さを凌ぎつつ、糧食の運搬にあたったのではないか。第五師団の第四梯団（筆者らの部隊）は、平壤・斧山店間の輸送を担当した（二三二頁）。

十月十日 晴天

此日酒一合ヲ分配セラル。

十月十一日 晴天

此日酒五勺ツ、分配セラル。

一〇月一二日（金曜）は外出する機会に恵まれたのか、平壤市内で「餅及栗ノ実等」を購入していることを記している。兵士たちは甘いものに飢えていて、饅頭や餅などをよく買っていた。訓練などからの疲れから甘いものがほしくなるようだ。この時筆者たちは糧食運搬という重労働に毎日従っていたわけで、それを記録したのだろう。

十月十二日 晴天

当時当市ニ於テ販売スル者餅及栗ノ実等ニシテ余等ハ常ニ之レヲ購求セリ。

一二日に混成第一〇旅団（立見尚文旅団長）から第一軍司令部に、信濃川丸・海龍丸・住ノ江丸による海上輸送が成功したこと、それも一日二回の揚陸が可能なことを伝える電報が届いた（二三二頁）。また朝鮮政府からの、協力するという返答が大島公使から届き、戦闘部隊の運搬により平壤以北で糧秣の蓄積ができたことなどを勘案して、第一軍司令部は、一二日軍隊による糧秣運搬を中止し、二日後の一四日から前進を命じた。ここから考えて筆者の部隊は、再び出発準備に

追われる一日だったはずである。一〇月一三日（土曜）の記事は天候も含めて、ない。

一十月十三日

「従軍日誌」の記録する以下の順路は、『日清戦史』第二卷二三二―二三三頁に掲げる「第一軍行軍日割表」の「第五師団第二行進団隊」（表3）の記述そのままである（図2第一軍の行軍図）。一〇月一四日（日曜）は、平壤から順安まで約三〇キロを一三時間で歩いた。砲車を押しながら時速二キロほど歩いた計算になる。山道が少ないと「左程疲労セス」と特記して自分を誉めなくなるのだろう。

十月十四日 晴天

午前三時順安ニ向テ前進。午后四時到着。此日里程近ク且ツ山路少キ為メ左程疲労セス。

一〇月一五日（月曜）は順安から肅川郡まで約三五キロを約一二時間で踏破する。この日はやや強行軍だった。火薬の爆発事件は肅川郡でのことだろう。

十月十五日 晴天

午前四時肅川郡ニ向テ前進。午后四時当時朝鮮人カ火薬ヲ貯ヘ置キシカ其家居ニ火起リ劇烈ノ声音ヲ発シ破裂シタリ。但シ負傷者韓人一名。

一五日（月曜）から一七日（水曜）にかけて、第三・第五兩師団の梯団は、二日間の同一地駐屯をしており、休養をとらせている。

十月十六日 晴天

此日兵力休養トシテ滞在。

一七日（水曜）は肅川郡から安州まで約四〇キロを一三時間で歩きとおした。一四日からの三日間で最も距離があり、山道もあったので疲労困憊したのだろう、「困難ス」と短く感想を述べている。

十月十七日 晴天

午前四時安州ニ向テ前進。午后五時着。安州ノ北端司馬所営内ニ入り舎営ヲナス。

此日行程長ク且ツ山路ノミニシテ困難ス。

一八日（木曜）は、少し遅く出発したが、安州から嘉山まで約二五キロを一〇時間で歩いた。距離が短いのは、途中に清川江という渡河地点があり、それを渡るのに時間がかかったのだろう。二ヶ所の渡し場で時間を費やした、と「従軍日誌」は記している。兵士たちも疲労困憊だが、砲車や大行李・小行李を運んでいる牛馬も疲れ切っていて路傍に斃死しているものも見ていた。彼らは主街道である義州街道を進んでおり、その歩みを遅くするため清国軍は各地で火を放ち、その残骸を日本軍は見つめつつ進軍した。これも「敵ノ敗兵ガ悪意ヲ以テ」放火したのだ、と解釈される。清国軍も日本軍も、朝鮮という他国で戦闘を繰り返していたわけで、朝鮮の民衆こそ被害者だった。

十月十八日 晴天

午前七時嘉山県ニ向テ前進。午后五時着。路中牛馬疲労ノ為メ斃死シアルモノ五六頭ヲ見ル。

此日里程近キモノ二ヶ所ノ渡場アリテ長時間ヲ費シタリ。

路傍ノ家屋焼失シタル者多数アリシガ之レハ敵ノ敗兵ガ悪意ヲ以テ火ヲ点シ退却シタルモノナリ。

一九日（金曜）には嘉山県から定州まで約三五キロを一一時間で歩く。遠い距離を山道を含めて歩いたため、「困難」な行軍だった。筆者が短くつぶやくのは、相当苦しかったことを表わしているのではない。夕食の副食物は「只梅一個ナリ」で、營養補給にもなっていない。兵士たちが何を食べ、飲んでいたのかを知るには、こうした従軍日記を丹念に読み解いていくことではかわからない。

十月十九日 晴天

午前七時定州ニ向テ前進。午后六時着。此日里程遠ク且ツ山路アリテ困難副食物ハ只梅一個ナリ。

二〇日（土曜）、定州から宣川まで約五〇キロを一一時間で歩きとおす。距離は長かったが、山道が少なかったので、速いスピードで進むことが出来た。

十月廿日 晴天

午前六時宣川ニ向テ前進。午后五時着。此日ハ里程遠キモ山路少ナシ。

二一日（日曜）は宣川から鉄山まで約三七キロを一〇時間で歩きとおした。最初の一二キロは義州街道を行き、後半の二五キロは街道を外れ、補助街道を進んだ。後半が山道であつたようで、困難な運搬だつただろうが、そのことはぼやかれなかった。幕営ではなく民家を使った宿泊だつたから我慢できたのだろうか。

十月二十一日 晴天

午前六鉄山ニ向テ前進。午后四時到着。此日山路ナリ。此日ハ当地民家ニ入りテ舎営ヲナス。

二二日（月曜）は鉄山に滞在して「兵力休養」となった。鉄山も敗走する清国兵に襲撃されており、その分日本軍に好意的であつたようである。日本軍のために尽くしてくれている、という好感を筆者は記録している。「頗ル安寧ノ想」と高く評価している。戦争で被害が大きいのは、とりわけ子どもと女性だが、逃亡した女性がいなかったことを筆者も「安寧」の指標と考えている。朝鮮人商人たちは抜け目なく魚などを行商していた。民家に泊まり、これまで食べられなかった魚も食し、民衆も多く、市場もおそらく賑やかで、ホッとすると同時に「二層ノ勇氣ヲ奮発」させる一日となるところが軍人の日記である。

十月二十二日 晴天

此日兵力休養ノ為メ滞在。此地ノ人民ハ我軍隊ノ為メ尽ス処渺カラズ。殊ニ府市某ハ平壤ノ敗兵此市ヲ通過シ逃走スルヲ認メ之ヲ撃退シテ此地ノ安全ヲ斗リ我軍隊ニ力ヲ合セ其得ル処亦渺サル由。而テ此地ノ人民ハ逃走スル者ナク各其居ニ安ンシ其業ヲ取り婦人ノ如キモ一人トシテ逃走セシヲ見ズ。頗ル安寧ノ想ヲ呈セリ。之レカ為メ時々物々求メ安ク海魚ノ如キ渡韓以來口ニスルコトナカリシモ此地ニ於テ始メテ求ムルコトヲ得、其味一美ヲ感セシコト吾人ヲシテ一層ノ勇氣ヲ奮発セシム。

二二日午後、山県軍司令官（龍川にあり）は、鴨緑江渡河をめざし、二四日までに義州に集合するよう各師団・旅団に命令を下した。この時、山県は二人の師団長に訓示を特に出し、部隊に伝えさせた。『日清戦史』第二巻は「戒飭スル所アリ」と戒めたのだ、と表現しているが、いよいよ鴨緑江を渡河し、清国軍と本格的に戦ううえで、欧米諸

国の視線を感じていたではないか。全文を引用する（『日清戦史』第二卷附録第二十九。適宜句読点を補った。傍線も引用者）。

第一軍司令官陸軍大将伯爵山縣有朋ノ訓示

今や我軍將ニ鴨綠江ヲ渡リテ清國ノ疆内ニ入ラントス、夫レ清國ト開戦以來已ニ数月ヲ閲スト雖モ其戦タル単ニ朝鮮國內ニ於ケル清兵ヲ撃ツテ之ヲ破リ之ヲ卻ケタルノミ。長驅シテ清國ノ内地ニ入ルハ実ニ今回ヲ以テ始メトス。乃チ茲ニ部下ノ士卒竝ニ役夫ヲ警戒シテ大ニ其省慮ヲ要スルモノ有リ。抑々今日ノ戦タル、國ト國トノ戦ニシテ我軍ノ以テ敵トスル所ノモノハ則チ清國ノ軍隊ニ止マリ、蚩々タル黎民ニ至リテハ素ヨリ齒牙ニ掛クル所ニ非ス。而シテ人民ノ家屋ヲ燒棄シ財物ヲ剽掠シ及婦女ヲ羞辱スルカ如キハ敵ニ万国公法ノ禁スル所ニシテ、又文明軍隊ノ決シテ為サ、ル所、縦ヒ敵兵ニシテ公法ノ規矩ニ従ハス、文明國軍隊ニ反スルノ挙動アルモ我軍隊ニ属スル者ハ決シテ暴ヲ以テ暴ニ代フルノ所為アル可ラス。是レ我軍律ノ嚴禁スル所ニシテ多年軍紀ノ下ニ養成セラレタル軍人精神ニ富ミ且ツ名譽ヲ重ンスル我軍隊ハ上將校ヨリ下士卒ニ至ルマテ悉ク能ク之ヲ服膺シ、一人トシテ此嚴禁ヲ犯ス者ナカルヘキハ深ク信シテ疑ハサル所ナリト雖モ、万一不幸ニシテ之ヲ犯ス者アルニ於テハ軍人トシテノ名譽ヲ毀損スルハ勿論、実ニ軍隊ノ耻辱ニシテ、又國家ノ耻辱タリ。且ツ夫レ不幸ニシテ此ノ如キコト有ルニ於テハ、彼ノ人民ニ對シテ我軍隊ノ信用ヲ亡失スルコト少カラス、物品ノ徵発、役夫ノ使用等ニ至ルマテ為メニ非常ノ困難ヲ来タシ、我軍隊ノ行動ニ容易ナラサル障礙ヲ

發生スルヤ必セリ。決シテ之ヲ仮借スルコト能ハサルナリ。唯モ最モ恐ル、所ハ則チ我軍ニ属スル役夫ニシテ、彼等ハ固ヨリ教育アル者ニ非ス。又規律ニ馴ルル者ニ非ス。唯モ賃錢ヲ目的トシテ従軍シタルニ過キサルナリ。而シテ其數ヲ問ヘハ則チ數万ノ多キニ及ヘリ。是寔ニ軍隊ノ累ナリト雖モ、已ニ我軍隊ニ從ヒ來リ、軍属ノ部ニ列スル以上ハ其猖行ハ則チ我軍隊ノ耻辱ニシテ、又我國家ノ耻辱タリ。總テ軍人ノ非行ト同一ノ結果ヲ生セサルヲ得ス。故ニ役夫ニシテ家屋ヲ燒棄シ財物ヲ剽掠シ婦女ヲ羞辱スルカ如キ者アルニ於テハ之ヲ嚴罰ニ処スルコト勿論ナレトモ、之カ監視ノ任ニ当ル者モ亦同シク之ヲシテ其責ニ任セシムヘキナリ。我軍隊タル者深ク此処ニ注意シ互ニ相警戒シテ道德及法律ノ罪人ヲ出サ、ルヲ期スヘシ。

以上ハ師團長ニ於テモ已ニ充分ノ注意アリ、毫モ遺漏ナキヲ信スルト雖モ始メテ敵地ニ進入スルノ今日尚ホ一層ノ警戒アラントヲ切望スルナリ。

初めて敵地ニ清國領に侵入するにあたって、「部下ノ士卒竝ニ役夫ヲ警戒」すべきだ、というのが山県軍司令官の重点である。その意識は、日本軍は「文明國軍隊」「文明軍隊」という、万国公法、つまり西洋の基準に従った軍隊であるというものだった。そのため「軍紀」と「名譽」を重んじなければならない。その点で山県を最も恐れさせたのは日本人軍夫だった。輸送を全面的に請け負った軍夫集団は、總テの師団で雇用され、数万人の規模に膨れ上がっていた。彼らが、家屋の放火や財産の略奪、婦女子への暴行などの事件を起こしていて、

それを清国領で続けさせるわけにはいかない、というのが山県たちの危機感だった。

二三日（火曜）は補助街道をそのままどり、鉄山から龍川まで約四〇キロを行軍した。出発時間が不明なため所要時間はわからない。一〇月下旬の朝鮮北部はそろそろ寒さを感じるようになってきた。「露甚敷寒冷ヲ感ス」と記録している。長い行軍だったが、途中で雨に降られることもなく、鴨緑江に向かって着実に進んでいる。龍川まで来れば、鴨緑江ほとりの義州まで約四〇キロを残すだけである。一〇月二三日の時点で、一番進んでいるのは第三師団の第一・第二梯団と予備砲廠で義州南東約二〇キロの所串館、第一軍司令部と第五師団の第一・第二行進団隊は龍川まで進んでいた。龍川では住民が逃亡しており、物を買うなどの便はなかった。この日の支給品は、手拭と半紙で、酒は寒さ対策の「五勺」だろう。

十月二十三日 晴天

午前龍川ニ向テ前進。午后四時着。今朝露甚敷寒冷ヲ感ス。

此地ハ海岸ヲ離ル、コト約四里ノ所ニシテ人家ハ尠キニアザルモ如何セン人民ハ遠ク逃亡シ只空家ノミナルヲ以テ其用ヲ弁セズ。此夜手拭一枚半紙二十二枚酒五勺ツ、ヲ給与セラル。城牆内ニ舎營ス。

食料調達の困難さから、梯団を五つに分けて進ませてきたのだが、鴨緑江南の義州まであと一日の行軍、という距離に来て、まだ食料問題は解決されていなかった。第一軍司令部では、龍川に到着する頃には全軍一三日分の糧秣が確保できているだろう、という想定で進軍してきたが、二一日に龍川に軍司令部が到達した時点で、「全軍八日ヲ

支フルニ過キス」（第二巻二三五頁）という状況が判明する。第三・第五師団に加えて混成第六旅団も第一軍に加えられており、それは清川江左岸の安州まで到着していた（二〇月二日、二三五頁）。しかし、糧秣不足から、二二日軍司令部は、第六旅団の安州待機を命じた。いよいよ鴨緑江を渡り、清国領を攻撃することになり、兵力の充実が求められていたが、糧秣問題はそれを容易に許さなかった。

むずびにかえて

平壤での激戦、苦戦を終えて、筆者の部隊である野砲兵第五聯隊第三大隊第五中隊は、いよいよ清国領での戦闘を展開するため、鴨緑江に向かって進んでいく。漢城から平壤までの大問題であつた糧秣問題は、鴨緑江に向かう行軍でも同じように解決できなかった。その状態で義州へと第一軍は集結していった。次号で清国領での戦闘が展開される。参謀本部編の『日清戦史』と筆者の『従軍日誌』は、少しずつ異なる記述がある。行軍日程などは同じだが、戦闘の戦死・戦傷者数などに違いがあるのは、『従軍日誌』のほうが、直後であり、不正確という問題があるのかもしれない。整理した史料に基づく『日清戦史』の統計を基本として信じたい。この問題は、全体を書き終わったところと考えてみる。

（はらだ けいいち 歴史文化学科）

二〇一二年十一月十四日受理

表 1 混成第九旅団の軍隊区分（平壤攻略作戦）

右翼隊	歩兵第一一聯隊第二大隊、野砲第五聯隊第三大隊、分捕砲小隊
中央隊	歩兵第二一聯隊第一大隊・第九中隊・第十中隊、野砲第五聯隊第一大隊
左翼隊	歩兵第二一聯隊第三大隊（第九・第十中隊を欠く）
予備隊	歩兵第一一聯隊第一大隊、工兵第一中隊

（備考）参謀本部編『日清戦史』第2巻100～195頁より作成。

表 2 混成第九旅団の死傷者数（平壤攻略作戦の一部）

	戦 死	戦 傷
砲兵第五聯隊	将校 1 下士兵卒 6	将校 1 下士兵卒 30
歩兵第十一聯隊	将校 3 下士兵卒 26	将校 9 下士兵卒 89

（備考）参謀本部編『日清戦史』第2巻「附録第二十五 明治二十七年九月十五、六日 平壤戦闘死傷表」より作成。

表 3 第一軍行軍日割表

日次	第三師団 第一梯団	第三師団 第二梯団	第五師団第一 行進団隊	第五師団第二 行進団隊	予備砲廠
14日	博 川	安 州	肅 川	順 安	—
15日	軍 隅	嘉 山	安 州	肅 川	順 安
16日	亀 城	同 右	同 右	同 右	肅 川
17日	同 右	定 州	嘉 山	安 州	安 州
18日	新成里	宣 川	定 州	嘉 山	同 右
19日	院 倉	西林鎮	宣 川	定 州	嘉 山
20日	所串館	所串館	鉄 山	宣 川	定 州
21日	—	—	龍 川	鉄 山	宣 川
22日	—	—	—	同 右	西林鎮
23日	—	—	—	—	所串館

（備考）『日清戦史』第2巻 p232～233より作成。